

欧露の果てに

滋賀県 松 吉 勝 司

最後の所属、関東軍工兵幹部教育隊、満州チチハルより総司令部命により撤退。八月十五日（八月十六日？）ハルビン駅頭、朝の光に濡れた伊藤博文の胸像。片面白紙の満州日報の終戦の詔勅。教育より帰隊中の原所属独工一二の我が中隊付き井上准尉より全軍の終戦を知る。

○大御心に 涕（な）きつつも

雄心（を）ごころ 抑え 牙引きて

ああ 防人の 現（うつ）し身に

悲し 虜囚の 夢幾夜

八月九日入校の特甲幹に武人の躰教えつつ海林に入る。軍刀、眼鏡、兵は銃器を捨てて兵器廠跡の収容所へ。候補生とファイヤーストーム、短歌会。その中のどれかの作、

○戦いに 負けてはならぬ やつれ果てた

あの避難民の 顔を見たとき

は今も忘れ難い。背に既に生命なき児の骸を負って、ともに夏草の間に眠った断髪の若い母の姿もまた心に痛い。

○やすりもて 御紋章消す 兵ありき

ただ黙しおり 牙すてし身に

既に糧乏しく心荒れる兵もある。野蒜（ノビル）を掘る。

○海林の野の 秋草に

訣れて 愛し 五十人の

子等（おしえご）の行末 案じつつ

流れ 落ちゆく 牡丹江

特甲幹五十人と訣れる。十一月三日佳節、将校大隊として牡丹江発。

○祖国の空は 菊花咲く

佳節の 晨（あさ）の 旅立ちや

馴れし 満州野の 夕暮れよ

名残の宵の 綏粉河

ボグラニチナヤより入ソ、列車、北斗七星に向かつて走る。

○北辰凍つる 沿海の

山よ 林よ 野よ 河よ

あはれ 帰還の 夢絶えし

ビギンの街の 雪の色

○送りし 作業大隊の

見るに いたけきラボータや

「完勝」の名を 負いし身に

ああ 敗残の 恨みかな

沿線既に作業に従事する兵士を見る。ビギンの駅標に北行を覚悟する。

○夕べ 降りたつ バイカルの

湖（うみ）の汀（みぎわ）の さざれ波

旅路の塵は拭へども

憂い盡きせず イルクーツク

初めてのバーニヤ、瘦せたる将校大隊哀れ。バイカルは未だ凍らず。岸边に水汲みて洗面。

○千里雪野に 鳥も見ず

笛声長く 尾を曳きて

火輪は駆くる 果てもなき

旅路の夜の 寝（い）ねがたき

○ウラルの山の 朝吹雪

ああ時到期 機を得なば

懸軍はるか 長駆して

旌旗（みはた）を 樹つるべかりしに

かくて欧亜の境標を越えヨーロッパに入る。貨車の起伏 既に二十日余日。

○ペンザの駅の 朝の雲

ウクライナ指し ゆく旅や

流れの果ては さびしらの

雪の仮屋に 結ぶ夢

白い雪、くろぐろとオロシアの杜（もり）、足引きずりて辿るはラーダ収容所への道。土窟兵舎に眠る。

ドイツ兵の落書きあり。

伐採作業始まる。将校尉官若さは力、作業隊としてゴルドフに発つ。北鮮清津に戦った父の安否をその部隊長に聞きにゆく。

○異境の果てに 聞く父の

その散り際の 雄々しさに

神の摂理を 現し身を

心に 涕きし 幾夜かも

職業軍人たるもの生き延びて、老兵父の戦に果てたる運命を呪う。大和なる母未だ知らず。ゼムリヤンカの夢安らかならず。

○凍てつく夜の ペーチカに

ああ 郷愁の火は 燃えて

小暗き窓（とぼそ） すかし見る

家郷も 同じ 星の影

新しい年は巡れど ラポートは続く。

○ああ 白樺の 木の間洩る。

初日 拝（おろが）み 誦（ず）しまつる

大御言葉の畏こさに

我が身の罪の 嘆かれて

（陸海軍人にたまわりたる勅語）

○森 呀（こだま）する 斧の音

大樹 轟ると 倒れゆく

乏しらの糧 かこちつも

業に馴れ来し 昨日今日

森（しん）とした杜の中、二人で引く鋸のきしみ、風を起こして倒れる木の下になる戦友もいた。

ノモンハンの捕虜に会ったのもこのゴールドフの杜の中であった。

○閉じし 氷の下潜（くぐ）り

春 告げわたる 水の声

白樺の道 踏み残る

深山の雪の 踏みがてに

白樺に若いみどりの芽が出た。ビタミンとて摘んで口にする。食の足しにする野草も萌え出る春の到来である。

○風車しづかに 回（めぐ）る原

欧露に 春は来つれども

ヴォルガに続く 河面浮く

水泡（みなわ）に似たる 希（ねが）ひかな

ポケットの底に残る黒パンの屑をさぐりながらポータは続く。チェンストロイの壕舎を出て杜に入り、作

業を終わつての帰路は、人間の肩で挽く轡で伐採した木材を河畔への集積、その轡も溶けてゆく雪とともに挽きづらくなる。トラック（スチュードベーカー）が動き出した。

遠くタンボフの街に上る炊煙は、人の棲む所、あたたかい人の温もりのあるところと恋しく、女囚の頬の赤さと白い歯にほんのり性を感じる。

そして六月、帰還の知らせがきた。小さい汽車の挽く団平船の底に肩を寄せて、材木の積荷とともに皆の住むラーゲルに帰る。

ダモイの噂が高まる。往路と同じ貨車に揺られて東に向かう列車行、皆の心に明るい灯が点った。時はもう夏。

○雪原はるか たたなはる

其の面影は 今いづこ

緑ゆたけき北欧の

車窓の語り 絶えざりし

帰れるというのははかない願いであつた。夢を載せて轟々とボオルガを渡る列車は、半日も経ず、止まっ

てもう動かなかつた。北の下車駅キズネル。南へ八十キロ、草原に寝て三日、汚れた日本人の列がカマ河畔（ヴォルガの大支流ウラル山系に発する）はエラプガの街に入つた。一万人近い関東軍（クヴァントウスカヤアルミヤ）の将校を集めた僧院跡の虜舎。

尖塔の金の十字架（クルス）も色あせて、内庭の煉瓦の壁の胸の高さ横に連なつて銃弾の痕。

悲しき名よ、日本軍戦時捕虜（ヤポンスキーヴォエンスイブレンヌイ）

それからさらに二年、虜囚のラボータは続いた。森に木を伐り、煉瓦の壁を積み、薯を掘り、泥炭を切り、腰までの雪を分けて森に入り、腰までのヴォルガの水に漬かつて筏を解いた。倉庫番をとにした独空軍（フォツケウルフ）パイロット、ヘルムート・フランケ、独兵との間の児を抱いて鉄条網の外にたたずむネツカチーフのソビエトの若い妻？

十月の終わり、ヴォルガ川は凍り始める。カザン通りの白い外輪船は去り、帰国の可能性しばらく絶える。マローズの中に轡を挽き、斧を振るう。ラーゲルに帰

る昏れた道端の家の窓にベチカの火はあかあかと燃え、
二重窓のベゴニアの花の紅が目にも痛い。

凍えきったラーゲルの起居も、それなりに耐えるこ
とのできるようになった一九四七年の冬近く、終わりに
近い船便は我々をカザンに運び、本当のダモイの確
証を乗せて列車はウラル山脈を東に越える。スベルド
ロフスク（エカテリンブルク）の夜の空に生産の火は
赤く、沿線になおラポータの日本兵士もまだ見えるシ
ベリア鉄道をナホトカへ。アクティプのいじめもこら
えて触れる日本海の水は冷たい。

一九四七年（昭和二十二年）十二月、最終のこの年
の帰還船「雲仙丸」は函館に入った。

父亡き故郷の母に、許された字数の電報を打つ。

ミトセヘテ カエルミナトノ ヒサメカナ ブジ
カツシ

シベリア抑留体験記

静岡県 鈴木 伊太郎

明治四十四年三月一日、小笠軍土方村下土方二八六
六番地において出生。大正十五年三月、土方尋常高等
小学校卒業。農業手伝い。家族―父母、兄夫婦、弟、
本人、六人。昭和六年徴兵検査、甲種合格くじのがれ、
第一補充兵となる。昭和八年四月十二日、小笠軍大坂
村三七八一番地、鈴木左次馬の養子となる。昭和十四
年六月十日、満州黒龍江省慶城県華陽開拓団へ入植。
昭和十五年、家族皆渡満、農業を営む。

昭和十九年三月十日、満州戦車七連隊（二三〇四
二）部隊召集、入隊（勃利）。兵器は中位。動員令に
て南方行き、整備を十分にして出動。一部残留となる。
残留兵と転属兵とで戦車三十五連隊（一三〇四二）部
隊編制。戦車は残り物で悪い。整備して使う。兵器は
旧式が多かった。軍服は防寒服まで上等のものがそろ